プロレタリア通信

第21号

1990年9月27日
定価 100円

連絡先
〒170-91
東京都豊島郵便局
私書箱59号

振替 東京 0-191397
アジア政治経済研究所

発行『プロレタリア通信』編集委員会

☆万国の労働者団結せよ！
被抑圧民族の解放
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設

即位礼・大嘗祭闘争に決起せよ！

11・12、13即位礼、11・22、23大嘗祭を打ち砕く闘いにむけ、全力で決起しようではないか！

敗戦後四五周年、「主権在民」を表面に掲げながらも、「天皇」という君主制の存続を「象徴」という名目で容認してきた日本の支配階級は、この一〇年の間に憲法を形骸化させながら、しだいに帝国主義的侵略の意図を露骨に見せてきた。

「国民に親しまれる皇室」像をイメージする〈象徴天皇制〉は、一方において治安弾圧の強化と草の根右翼の組織化をはかりながら、反天皇制諸運動を圧殺することに躍起となっている。かつて低落した天皇人気を快復するために仕組まれたアキヒトとミチコのロマンスで民衆の心をくすぐり、今回も秋篠宮と紀子の純愛物語を提供して、たおやかなマイ・ホーム天皇制を印象づけた。女性週刊誌やテレビのお茶の間番組を総動員しての企みであった。しかしながら他方では行動右翼を叱咤して「天皇に戦争責任あり」として自治体首長や「政教分離」原則にしたがって天皇制賛美を批判したキリスト教系大学長へテロ攻撃を加えるなどで、天皇制への批判言論をさえ暴力的に抑圧してきている。

こうした巧妙な硬軟とりまぜた手法で民衆の目を天皇の方へと向かせ続け、古来から民衆の中にある「臺種」へのあこがれ」をあおりあげてきた。その最大の仕上げが〈天皇制神道〉に拠ってたつ神秘にして華麗な儀式の強行であった。八八年秋のヒロヒト重態発表直後に始まる自粛の強制八九年一月七日の死の発表から二月の葬式までの一ヶ月にいたる国民服喪への動員、そして今秋十一月のアキヒトの即位礼と大嘗祭の挙行によって、天皇制賛美への大動員を結実させようと策している。

明治ムツヒトによる近代天皇制国家の成立このかた蛮行を平気で行ってきた侵略の歴史をひた隠しにしながら、自らの戦争責任を「一部軍閥の愚挙」になすりつけ免罪を獲得した日本帝国主義は、いまや「経済大国」「援助大国」の名のもとに対外経済侵略にちみちをあげ、全世界の平和を望む民衆の激しい非難を浴びながらも、なお侵略の強化をはかっている。日本帝国主義がその進路の前に掲げた「国際国家日本」とは、地球上からすべての緑と水を奪い、第三世界民衆の貧困化と窮乏化を促進することによって成り立つものである。そうして獲得した富の万分の一ほどを日本国内の民衆へと分与することで、甘い汁に酔わせ、神秘的な存在感を作り上げる天皇制という麻薬で良心を喪失させ、民衆をしてあらたな「国民統合」という一億二千万人の総翼賛化を狙っている。

「天皇に戦争責任あり」と感じ、かすかながらも天皇制への疑いをもつ民衆をして、一挙に洗脳し、天皇制賛美、現支配体制堅持へと転向させようと仕組んできたのが、今秋十一月十二、十三日の両日にわたる即位礼の華麗な式典、そして続く二十二、二十三日の両日にわたる大嘗祭の神秘にして荘厳な神道儀式の挙行である。この二大イヴェントを成功させることは、日本帝国主義を新たな侵略へと弾みをつけさせていくことになろう。だからこそ天皇制賛美の声に疑いを持つ民衆の小さな運動にさえ、支配権力は血まなこになって「双葉のうちにつみとれ」とばかり、必死になって抑圧を仕掛けてきている。

反天皇制運動に対する民衆有志の支持の声は、一億二千万総翼賛化策動の中でしだいに高まりをみせ、かつて日本の侵略を受け、今また侵略され続けている海外各地の民衆の声とも重なりあい、かつてみたこともないほどに高揚してきた。そうした声をエネルギー化していくことが、当面の我々の課せられた問題で、しかも時々刻々と、その時間が迫っている。

この期に際して立ち上がらなければ、反天皇制運動の高まりは一挙にしてしぼみ、それ以降の再起の時は遠くに去ってしまうであろう。もちろん今秋十一月の闘いだけで、強固に民衆の心中深く根づいている天皇制への依頼心を脱却させていくことに至らないことは自明のことだが、天皇制の存在をアキヒト限りで廃絶させるためには、とにもかくにも今

三里塚現地集会 9月30日(日)午後1時 現地横堀現闘本部前
主催：三里塚芝山連合空港反対同盟（熱田派）

■9月29日　前夜祭PM8-10 東峰共同出荷場
『三日戦争』上映と農民との交流 会費1000円

10月10日　「即位の礼・大嘗祭」に反対する 10・10全国集会　於：芝公園
主催：ゴメンだ！共同行動

10月12日　ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ・ｲﾗｸ・ｱﾗﾌﾞ問題を考える
pm6-9 中央大学駿河台記念館
主催：ﾌｫｰﾗﾑ90's/情況

11月8日　アキヒトの即位礼・大嘗祭を打ち砕く11・8集会　於：豊島勤福
主催：東京・天皇制を考える会

イスクラ

▲イラクは電撃的にクウェートに侵攻した。北アメリカはいち早くサウジ防衛を口実にペルシャ湾にあらゆる艦艇を集結し地上軍を派遣した。さらに多国籍連合軍の形成とその指揮を掌握した。

▲アメリカはいぜんとして世界の警察である。つい先ごろパナマに侵略し侵略軍はいまもていすわっている。ニカラグアに反革命介入しサンディスタに武装解除をせまっている。

▲日本政府はこうした北アメリカの侵略、反革命軍事行動を財政的に支援してきた。そればかりではない。自衛隊を何らかの名目で派兵しようとしている。野党もまた「金のみでなく」を主張しだしている。

▲地域紛争という名の諸民族間闘争は「相互依存相互反発」といった代理のたたかいなどではない。帝国主義によって綱の目のごとく再分割された国境線上でこれからも全世界で起りうるし、旧宗主国・帝国主義反対斗争としてより先鋭的にたたかわれる可能性は十分にある。特に、中東、中央アジアにあっては国境にくくられる民族というよりは、その文化的領域において宗教のもつ影響の方がより強烈だと言っても良い。

▲そこでは資本の力、ゲバルトの歴史よりはるかに長いのであって世界市場（世界資本主義）の枠にはめこむための「民族の自決」・独立国家の形成は無力ですらある。そこでは単に「同等の権利」という形式で済されるような代ものではない。

▲いうところの「域内解決」としての世界市場のくびきにつなぎとめることにも強固として反対してゆかなければならない。

▲原則的に被抑圧諸民族の自由な連帯と労働者階級をはじめとする被差別人民大衆の団結・融合が展望されなければならない。

（高橋）

秋十一月の闘いを成功させ、「天皇制を張り子の虎」化させていくことにつきよう。

わが『プロレタリア通信』は第十五号、第二十号において、天皇制との闘いに立ち上がることを明言してきたではないか。十一月十二、十三日、二十二、二十三日の闘いは第一歩であり、それへの決起が天皇制廃絶へ向けての長い闘いを成功させていくための橋頭堡となろう。

それへの決意を明らかに固める為にも、〈東京・天皇制を考える会〉が主催する『アキヒトの即位礼・大嘗祭を打ち砕く十一・八集会』の組織化を取り組み、集会を成功裡に勝ちとろうではないか。

期日	名称	場所
1月23日	賢所に期日奉告の儀	賢所
同日	皇霊殿神殿に期日奉告の儀	皇霊殿、神殿
同日	神宮神武天皇山陵及び前四代の天皇山陵に勅使発遣の儀	宮殿
1月25日	神宮に奉幣の儀	神宮
同日	神武天皇山陵及び前四代の天皇山陵に奉幣の儀	各山陵
2月8日	斎田点定の儀	神殿
8月2日	(大嘗宮地鎮祭)	皇居東御苑
斎田抜穂の儀の前日	斎田抜穂前一日大祓)	別途決定
秋	斎田抜穂の儀	斎田
	(悠紀主基両地方新穀供納)	皇居
11月12日	即位礼当日賢所大前の儀	賢所
11月12日	即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀	皇霊殿、神殿
11月12日	即位礼正殿の儀(※)	宮殿
11月12日	祝賀御列の儀(※)	宮殿～赤坂御所
11月12日～15日	饗宴の儀(※)	宮殿
11月13日	園遊会	赤坂御苑
同日	内閣総理大臣主催晩餐会	別途決定
	一般参賀	宮殿東庭
大嘗宮の儀の2日前	神宮に勅使発遣の儀	宮殿
	(大嘗祭前二日御禊)	
同日	(大嘗祭前二日大祓)	皇居
大嘗宮の儀の1日前	大嘗祭前一日鎮魂の儀	皇居
同日	(大嘗祭前一日大嘗宮鎮祭)	皇居東御苑
大嘗宮の儀の当日	大嘗祭当日神宮に奉幣の儀	神宮
同日	大嘗祭当日賢所大御饌供進の儀	賢所
同日	大嘗祭当日皇霊殿神殿に奉告の儀	皇霊殿、神殿
	大嘗宮の儀	皇居東御苑
	悠紀殿供饌の儀	
11月22日	主基殿供饌の儀	
11月23日	大饗の儀	宮殿
11月24日及び25日	(大嘗祭後一日大嘗宮鎮祭)	皇居東御苑
大嘗宮の儀の翌日	即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀	神宮
神宮に親謁の儀の後	即位礼及び大嘗祭後神武天皇山陵及び前四代の天皇山陵に親謁の儀	各山陵
京都に行幸の際	茶会	京都御所
神霊及び各山陵に親謁の後	即位礼及び大嘗祭後賢所に親謁の儀	賢所
同日	即位礼及び大嘗祭後皇霊殿神殿に親謁の儀	皇霊殿、神殿
同日	即位礼及び大嘗祭後賢所御神楽の儀	賢所
大嘗宮の撤却	(大嘗祭後大嘗宮地鎮祭)	皇居東御苑

象徴天皇制を葬り去ろう！（2）

⑤日本が国家である以上、軍隊をもつのは当然である。軍隊をもたない国家などありえない。

●右翼の発言を聞いて自分が考えたこと

よく見かける街頭右翼とは違う印象を与えていただけに彼らの発言にある種の期待をもって聞いていた。「ある種の期待」とはこれだけ堂々と大衆集会に出て来たのには少しは目新しい理論をもっていると自負しているからであろうと。しかし期待は見事に裏切られた。古臭い右翼思想そのままの主張でしかない。

どうしてこのような時代錯誤な主張を堂々とできるのだろうか？一般の常識なら厚顔無知としか言いようがない。教科書問題やヒロヒトが死ぬ前後に全世界の世論が日本帝国主義の残虐な侵略行為やヒロヒトの戦争責任を徹底的に糾弾していることを知らないとでも言うのだろうか！

これは彼らの個人的資質から来るものではない。天皇制思想などという時代錯誤なものにどっぷりつかってしまっているがために現実が直視できず、本来見えるはずのものが彼らには見えないのである。見ようとしないといった方が正確かもしれない。ここから、天皇制から解放された戦後の歴史は「日本人を道徳的に駄目にした」今こそ、理想的な天皇中心国家であった奈良時代の姿に戻らなければならないなどという時代錯誤な主張が堂々となされるのである。　このようなあからさまな反動思想は到底日本人民には受け入れられない。だから彼らは暴力に訴えるのである。

十一月に行われようとしている「大嘗祭」は「国家的儀式」の様相を呈した、今見て来たような右翼反動思想の人民への押し付けである。だからこそ国家権力は早くから東京を中心に厳戒態勢を敷き広範な人民の反対運動鎮圧にやっきになっているのである。我々はすでに広範に決起している人々とともに反天皇制闘争を闘っていかなければならない。

（つづく）

九・三〇現地集会に結集しよう！

侵略反革命前線基地三里塚空港を廃港へ！

イラクによるクェート侵攻以来北米帝を中心とした帝国主義諸国のイラク非難の大合唱がかまびしい。北米帝はサウジへの二五万の軍の派遣を決定し、多国籍軍はイラクの侵攻非難の口実の下、自己の権益の擁護の為に躍起になっている。憲法による制約で本来なら軍隊をもてないはずの日帝ですら四〇億円の援助金の支出と要員派遣を決定し、また自衛隊派遣すら確認されようとしている。かつてであれば考えられないような状況が一般国民のさしたる非難もあびずに大手をふるってまかり通っている。こうした事態は、一般的市民層まで含めて海外出張という形での第三世界侵略が常態化し、日常的な意識のなかで帝国主義の発想が常態化していることを示している。成田を玄関口とした人員、物流の交通と、高速度デジタル通信網を通じての金融操作のシステムは全世界を網羅し、世界中のプロレタリアをその指揮下で搾取せんと欲している。今日の成田空港における「通勤電車なみ」と運輸省をして喧伝される混雑がまさしくこうした海外にむけた日帝の侵略の飛躍的拡大のよるものであることをまずもって確認しなければならない。我々は日帝の侵略反革命の前線基地たる三里塚空港を断固廃港に追い込まなければならない。

成田治安法を粉砕せよ！

八月二二日中核派の三里塚闘争会館が運輸省により、強制撤去された。さらに二四日には、昨年八月から九月にかけて「使用禁止、市」が適用された団結小屋にたいし、さらに一年間の延長がなされた。今日の三里塚現地は成田治安法による不当不法な攻撃が矢継ぎ早にかけられ、北原派の天神峰現闘本部の封鎖に対する失効停止申し立て訴訟に対する却下判決の「普通の集会、宿泊、施設利用も処分事由に充る」とする決定に明かなごとく、運輸省の判断次第では使用禁止命令の出ている団結小屋はいつでも封鎖・除去できる体制が打ち立てられようとしており、治安法が成立するにあたって指摘された危険性がまさしく現実となっているのである。こうした状態を容認していれば、いずれ、全国の住民運動、労働運動の弾圧に波及するのは必至である。我々は、こうした非民主的、反人民的な成田治安法の反動性を満天下に明らかにし、成田治安法に反対する巨大なプロレタリア人民の隊列を形成してゆかねばならない。

九・三〇現地集会に結集しよう！

「今度の集会は九月三〇日ということで、…強制測量阻止闘争という、…闘いをやった日だ。当時は支援はほとんどいなくて、われわれ農民だけでやった。その時は糞尿爆弾と石灰爆弾を作り、同盟も一五、六逮捕されたが、これを阻止し…、現在でもそういった闘いが、目を閉じると頭ん中に浮かんでくる。また、それを励みにして自分自身を励まして、検問だとか弾圧などに堪え忍んでこれたと思う…勝利するまで闘って行きたい」と述べ、闘争勝利にむけた変わらぬ決意を述べている。我々はそうした現地農民の闘いへの決意を励まし、断固として連帯してゆかねばならない。今日の状況がまさしく我々共産主義者のプロレタリア人民への連帯の仕方の試金石としてあることを肝に命じ、その責務を全うしようではないか。農民のあれこれをあげつらい、そのことによって自己のなすべきことから逃亡する事は主義者のなすべき道ではないのであるともに闘わん！

四波にわたる全国統一闘争の総括

国労は八九年十一月三〇日〈全面解決要求〉実現の第一波全国統一闘争として始業時より二時間のストライキを行った。そして第二波として九〇年一月十八日、貨物会社における二四時間ストライキが全国五〇三六名の参加人員をもって闘われ、運行の二五%に影響を与えた。第三波は二月二六・二七・二八日、旅客会社の乗務員（運転士、車掌）の七二時間ストライキ。運転区地上勤務員と旅客駅の始業時から半日ストライキの反復を設定した。しかし二月二二日、国労本部は総選挙後の政治情勢やJR・清算事業団当局の動向など三月中旬から下旬にかけて決定的に重要な局面を迎える、として延期指令をおとした。

そして三月十九・二〇・二一日、全国約六〇〇職場、のべ一万五一〇〇名の参加をもって七二時間ストライキを闘った。また三月十二日からの東京総行動では連日、本社前集会、中労委前集会、各JR背景資本、運輸省・労働省への抗議行動、要請行動が取り組まれた。さらに三月二九日から半日ストを軸に指名ストが約九二〇〇名で取り組まれた。

これより先、国労本部は九〇年一月十日「JR労使紛争の解決をめざす具体的な方策とその手順について」と題する申入れを中労委へ提出した。その内容は「地元JRに採用したものとする」その上で「採用後、本州JRへ出向する」というものである。また二月九日には国労・国鉄闘争支援中央共闘会議・弁護団の三者による中労委要請を行った。それは「職権による和解勧告」と、JRが和解に応じない場合は「すみやかに命令を発せられたい」というものである。これは国家的不当労働行為としての採用拒否、クビ切りの犯罪性を隠蔽し免罪するものである。と同時に再三くり返しているように第三者機関たる中労委に依存し、すべて責任を押し付け、自らが闘争に勝利していくという決意のカケラもない姿をも浮きぼりにした。さらにこの時点で国労は出向攻撃に対する無方針ぶりを露わにし、同意ある出向受け入れに踏み切ったと言っていいだろう。

一方、社会党JR対策特別委員会は三月十五日海部首相、三月十九日には運輸大臣へ三項目の申入れを行った。三項目の内容は①再度の広域採用②三月三一日でJR採用、同日付退職③退職金の上積み、であった。この社会党案に呼応して運輸省は三月二〇日、退職金の六ケ月上積み実施を発表。三月二三日には、JR東海、西日本、四国が社会党案第一項の（第五次の）広域採用実施を発表した。JR東日本と貨物は「三月下旬のストライキを中止しない限り応じない」態度に終始した。

そして三月二七日、社会党JR対策特別委員会委員長田辺誠と国労本部三役が会見。田辺委員長から「広域採用に応じるよう指導」することと「ストライキ回避にむけ検討」することの要請がなされた。翌二八日、国労から「解雇予告が凍結され、地労委命令にもとづく解決を内容とする不当労働行為問題との一体解決を前提に広域採用に組織的に取り組む」「ストは解雇予告の凍結、中労委における解決の見通しなど総合的に判断する」との回答があった。この時、国労本部が固執していたのは『社会党B案』なるものであった。この『B案』とは本州JR広域採用後、地元九州、北海道への出向である、と言われている。

これら一連の動きに対して、JR総連は、三月二八・二九日に「決起集会」を、JR東労組は二九日、臨時大会をそれぞれ開き、清算事業団問題の身勝手な政治的解決策反対「働く意欲のない者のJR採用反対」「ゴネ得を許すな」「逆差別だ」と叫び「ストライキを提起する」という混乱を示した。JR総連は、退職金の上積み撤回、広域採用撤回を要求するとともに分割・民営までに退職した者のうち希望者をJRに採用しろ、希望しない者には当時の賃金の六カ月を支給しろと要求した。労働組合がユニオン・ショップ制などをタテにとり少数派のクビ切りに手を貸したことは過去、現在多々ある。しかし公然とクビ切りを要求し、そのためにストライキ権の行使を持ち出すという事態は聞いたことがない。国労、千葉動労のストライキに対してJR資本と一体となり、いやそれ以上に現場管理者をウラ指導までしてスト破りに走ったJR総連＝革マルの焦燥感はここに極まったと言っていい。それは革マルの戦略たるJR労使運命共同体路線に亀裂が入ることへの恐怖感に他ならない。幸か不幸か国労「協・共連合」はせいぜいが新左翼＝「暴力集団」程度の認識であり、生じた亀裂を押し広げる決定打にはならなかった。JR資本はスト破りに貢献したとして三〇〇〇円から五〇〇〇円の褒賞金を出しその労に報いるという形となった。逆に千葉動労に対しては十二時間くり上げてのストライキ突入に「違法ストだ」といいがかりをつけ一四一名に不当処分攻撃をしてきている。

こうした解雇を迎え一連の国労の大衆闘争の盛り上がりは社会党をして調停に乗り出さざるを得ない状況を作り出した。しかし、清算事業団当局は三月九日解雇予告の提案。三月二〇日解雇予告。三月三一日には解雇通告と、二度目のクビ切りを強行したのである。

この三年間、国労の清算事業団闘争はクビ切り反対闘争か、雇用確保かをめぐり方針が不明瞭であった。

それどころか国労は雇用闘争と称して一貫して本州JRへの広域採用を強引なオルグで推進してきた。しかし、九〇年一月二二日に締切られた「最後のJR採用募集」であると言われた第四次広域採用に応じた労働者は全国でたった一人であった。地労委命令を守らせJRに復帰するという固い決意の現場の清算事業団労働者から本部方針は否決されたと言ってもいいだろう。まさに「協・共連合執行部」は乗り越えられたのか。国労清算事業団闘争に真の指導部は存在しなかった、として総括するべきなのか。

「三里塚に緑の大地を！」農業問題学習会開かる

七月二一日～二二にかけて、三里塚現地に於いて「三里塚に緑の大地を！労働者・学生・市民の会」の農業問題学習会が開かれた。マイクロバスと普通車に分乗した一行はまず、島寛征さんの畑を訪れたのち、木の根ペンションへと向かった。学習会は主催者としては農業問題と三里塚、支援と反対同盟、ということに的を絞り、今日農産物の全面的自由化に瀕し農業そのものの展望自身をも含めて論議をする予定ではあったのだが、不勉強のせいもあり、農法問題に終始してしまったのは、すこしく悔いの残るものではあったが、我々の知り得なかった三里塚の現実等々を学ぶことができた。翌日は堀越さんのお宅を訪れ、微生物農法の核ともいうべき堆肥づくり等についてお聞きした。帰りには小泉さん宅をお邪魔してから一路東京へとむかった。

「ドキュメンタリーシネマの三里塚」成功裡に終了

九月二三日、渋谷勤労福祉会館で「三里塚の土地収用を許さない首都圏行動」主催による映画祭「ドキュメンタリーシネマの三里塚」が開催された。「鹿島パラダイス」「第二砦の人々」「草とり草紙」の三本立てで上映された会は六時現在で120名をこし、立ち見まででる盛況ぶりで、より多くの人に三里塚の事を知ってほしいという事ではじめた主催者の狙いはほぼ成功したといってもよいだろう。ここに結集した人々の一人でも多くを今後いかにして三里塚闘争に引きつけてゆくのか、がこれからの課題といえよう。

秋期連続闘争にむけて

高橋 崇

はじめに

われわれは、これまでレーニンにならって原則主義的に政治・経済・理論闘争をたたかってきた。

このことは、自己を地域闘争主義やローカルパーテーと位置づけることなく何処までも世界党と位置づけることを課してきたということである。たしかに、われわれは、小グループであり、何ほどの階級闘争をも組織しきれていない。だがしかし、だからといって、へり下り自己限定する理由を認めなかった。われわれは少なくとも全世界をやきつくす一点の火花たらんとしてきたのである。それ故、あえて原則主義的に組織活動を展開してきたのだ。

われわれは、今秋期闘争を連続した一大決戦としてたたかう決意でいる。この激動の三ケ月をたたかいきることにおいて今日のわが帝国主義の危機の一切を暴露しきり、われわれの原則主義と政治組織路線の豊富化をかちとってゆくのでなければならない。この激動の三ケ月をたたかいきることによって、これまでつちかってきた原則主義的三大闘争の具体的政策もまた血肉化されてゆくであろう。すなわち、労働組合運動の再生をかけた全国的な政治的交流が展望されなければならないし、日本農業の見直しと全く新たな農民運動が組織されなければならない。さらに、九一年統一地方自治体選挙闘争に深い関心をはらわなければならないであろう。そして、イデオロギー諸形態の最も重要な環をなしている文化戦線におけるたたかいに参列することなしには、真の意味でイデオロギー闘争とみなすことはできない。いずれにしろ、こうした戦線は、これまでのわれわれの歴史のなかでスローガン化されることはあっても軽視されつづけてきたのである。労働組合運動ひとつとっても街頭闘争に引きづり出す方便とされてきた。六〇年安保・七〇年安保当時、公然と労働者はブントにおいては批難されていたのであって、労働者革命党など組織しうるはずもなかったのだ。

したがって、こうした諸戦線に踏み出すにあたって、何ひとつテキストはない。自らその典型・ケルンたらんとする以外に道はないのである。

A 党建設をめぐって

われわれはこれまでの「政治組織路線」を確認しつつ、その豊富化・政策化をおしすすめてゆかなければならない。ここにその大胆な試案を提案しひろく議論を組織してゆくものである。

はじめに、これまで主張してきた文献を列記しておく。

『プロ通』五号で行動綱領、九号で第二回総会報告と引きつづく総会での討論のまとめ、一二号で、政治組織について――我々はどのような政治をめざしているのか――となっている。特に、『プロ通』九号、一二号において、我々の活動の、したがって団結のその時々の水準を物語ってきている。また、五号は、いまや歴史的文献となっている。実際、修正や加筆がおこなわれてきた。しかし、我々が六〇年代から七〇年代のたたかいを引きづってきたという意味で、ふたたび同盟したという点においても歴史的な文献となっている。パンフレット『なにからはじめるべきか』をも是非一読しておいてほしい。というのも、「政治組織路線」・党建設という場合、われわれは、あの前人未踏の武装闘争をたたかい一敗地にまみれ深く傷ついていた。そこでは、どうしてもこの三〇年間を内省をこめてふりかえる必要があった。われわれには、大きな誤りも失敗もあった。このことを真摯に受けとめどのように克服してゆくのか、これからも問われつづけるのであるが、『プロ通』発行以前に討論されていた事柄をまとめたものとして、パンフレットNo.3はある。われわれは、かつてのわれわれのたたかいの、その精神、志を誤りであったなどとただの一度も反省してこなかった。そうではなく、不十分性を、何故に一敗地にまみれねばならなかったのか、そうした反省としてこの一〇数年間はあり、これからもこの内省は、日本の階級闘争の勝利の日までつづくのである。ただ、具体的実践的点検なしにはあり得ないのであって、そうしたものとして個々の点検と確認はなされてゆかなければならないのである。

B 日本階級闘争の現局面

ここでは何か情勢分析として明らかにしようとするものではなく、さし迫った主体的な活動の指針について述べるものである。

一．労働組合運動について

結論から述べれば、当面組合主義に徹した現場主義を徹底することを通して工場・職場にその拠点をつくり出してゆかなければならない。

わたしが、ここで言うところの組合主義・現場主義とは、雰囲気政治と引きまわし、街頭主義に対置された用語としてである。現場に思想としてもちこまれるのはいうまでもなく戦闘的な賃上闘争としてあった左右の民同組合主義ではない。七〇年代以降とり組まれてきた差別反対のたたかいやマイノリティに連帯した地区地域に工場・職場から出てゆくことである。いわばそうした内容において、自己を解放するのみならず、いわゆる少数者との共同性をつくりあげることである。

われわれは、「戦斗的総評の防衛」とか「日本型社民」などと社会党や民同につき従ってきた左翼の加入戦術や逆手論と根底的に袂別しなければならない。だからといって、超観念的に「評議会運動」だとか「少数派組合主義」などと党派の政治思想のせまさを組合にまで強制するほどオメデタクはない。

また、労働組合運動について「社会主義との結合」といった思い入れ、一体何を主張しているのか、主張している当人さえ明確となり得ないようなスローガンを唯一党派性とするようなセクトでもない。

さて、わたくしが地区に入り、労働組合運動、労働者運動に直接関わり、一定の責任をもつにいたったのは、一九六五年日本「韓国」条約締結と国会批准がなされた直後からである。

六五年三月東京でのブントの統一、四月関西ブント（烽火派）との統一準備委の結成（先駆）。東京では全党派結集でもたかだか四・五百名の街頭闘争の時期である。社会党を含め最も大衆運動の停滞していた時期である。であるが故に、社会党青少年局と総評・地評青年部による反戦青年委員会は民青に対抗して結成されたのである。こうした時期にわたくしは、地区に入っていった。当時、われわれが主張していたのは、帝国主義的再編（合理化）反対。産業別労働組合の大同団結、未組織の組織化、ストライキ、そして「反帝戦略部隊」の形成である。こうした、スローガンや主張は、日本共産党の反米帝・民民革命路線と国際金属労連による合理化推進、民同による春秋の賃斗に限定されたたたかいに対するものであり、反戦青年委員会内部における党派闘争を意識するものとしてあった。しかし、ある意味では、組合運動について右も左もわからないという状態であり、何かと言いば「ゼネスト」をよびかけていた。

こうした、我々のスローガンとよびかけは、六七年の「二つの羽田闘争」を経るなかで労働者の武装が問題となり、ソビエト運動、地区ソビエト論が展開されだしてきた。ついに、地区反戦青年委員会を基礎として地区共斗（学生を含）とマッセンストライキ論が武装ソビエト論として実践化（六九年）されることになる。このソビエト論はまた、「階級的労働組合運動論」という別名をもって、長きにわたってブントの組合運動の指針となってきたことは周知のとおりである。

だがしかし、われわれは、七〇年安保闘争と武装闘争に敗北したのみならず、世界革命の政党をつくってゆくうえにおいても敗北してきた。われわれのこの主体の敗北にもかかわらず、七〇年代に入って、障碍者解放運動をはじめ反差別のたたかいと「争議団闘争」に実践的な連帯をつくり出してきた。こうした、地区・地域共斗が根強くたたかわれてきた。特に、第二次石油ショックとスタッグフレーション下で総評労働組合運動が大きく変質するなかで、マイノリティとの連帯・共生がうたわれ、エコロジカルな連動への参加など労働組合運動は多様化してきている。

私が「労働組合運動の再生」と言うとき、それは、総評の再建や戦斗的一九五〇年代の「ぐるみ闘争・地域闘争」としてあるのではない。まったくそうではなく自らこの一〇数年間たたかいとってきた実践の交流と連合（ネットワーク）である。この実践は、自ら論理化してゆかなければならない。その場合冒頭あげた、小セクトの主観的スローガンは百害あって一理もないということは言をまたない。

自らの経験を自ら理論化してゆく一里塚として現場交流・共斗がある。したがって、すでに形成されているナショナルセンターに拘泥されることなくフランクに長期展望にたたなければならない。

繰り返すと、経済学的に労働者階がプロレタリア社会主義革命の主体であり、主力だと言うことと、組合運動が、即、革命政党の代行機関とすることには大きなへだたりがあるということにほかならない。

ところで、今日の日本労働組合運動は世界的な、と言ってもリアルには、日本の金融資本と多国籍企業の侵略によっておびやかされている多くの国々の労働者との連帯が課題となって久しい。国際金属労連・JC型組合運動が日本では圧倒的主流・総連合としてナショナルセンターが結成され、その枠組とイデオロギーをもって企業とともに組合も反革命の担い手として「輸出」されている。こうした連合型とひと味違った労働者の連帯が模索されなければならない。昨年暮から今夏にかけて、スワニ、韓国スミダ、タナシンなどの労働組合との連帯が各種労働組合と市民運動の共同のたたかいとして成立し一定の勝利をおさめた。また、来日外国人労働者支援が取り組れている。また、こうした運動に注目するとともに、それぞれの工場・職場で自らたたかいを組織しなければならない。その力のうえに「支援・連帯」はかちとってゆかなければならないであろう。

一方、未組織の組織化という場合、六〇年代と根本的に労働のあり方が変化してきたということを見すえておかなければならない。たしかに、公企体の民営化・合理化は、六〇年代と似通った側面をもっている。とりわけ、国鉄の民営化は帝国主義的な一大再編としてあった。民営化・合理化は、六〇年代の大型合併と異なるかにその形態は見えても独占企業のより一層の営利主義にあることは疑いないし、より独占の強化を計ったことはこれまた疑いないところである。そして、何よりも労働者の団結権・争議権を有名無実化せしめ、JC型イデオロギーで固めたことも事実なのである。そこでは、左右の民同＝総評・同盟の経済主義的組合主義でさえ粉砕されたと言うことに他ならないのである。したがって、国労の支援・争議団の支援という場合全く独自に考えてゆかなければならないであろうということもまた自明なのだ。民同左派や日本共産党が言うところの「国民運動」などはマユツバものだと言わねばならない。

二　日本農業・農民問題について

どうして、われわれは、農民を組織できなかったのか。ブントは、資本主義発達史論のうちに農民を位置づけることはあっても、それはあくまで「情勢分析」の一コマとしてあり「情勢分析」それ自身大衆闘争・街頭闘争のための、したがって学生運動の方針としての「情勢分析」である。こうして「総括・情勢分析・任務方針」というスタイルが定着し、この定式は自治会運動などにも適用されたのであった。

また、内容としては、没落する階級・階層一般としてとらえられていたにすぎず、良くて、農民の非資本主義的側面と独自の運動を認めず、たかだか「労農同盟」が説明されるにとどまってきた。

最近、新左翼を自称する人々によって、日本の農業・農民問題が実践的にはともあれ、論としては言及され出してきている。その第一は、農業のもっているエコロジカルな一面を強調するとともにそれを第三世界革命論との結びつきとして主張する傾向としてある。かように主張する人々は当然にも科学主義・生産力主義の否定、そしてさらには労働者階級など存在するのかと言った市民主義的な傾向としてあることはいうまでもない。たしかに、キューバ革命に引き続く、韓国における学生運動による季承晩大統領の打倒、そして日本における全学連、この六〇年を前後するたたかいから、ヴェトナム反戦闘争と中国文化大革命、フランスにおけるカルチェラタン・西ドイツのSDSのたたかい、チェコのプラハの春と、全世界的規模で約一〇数年間たたかわれたのである。しかも、この一〇数年間のたたかいの主力は、かつての国際共産主義運動や社会民主主義運動と全く無縁な地平でたたかれたというところが最大の特徴をなしているのである。こうした運動が第一次・二次石油ショック以降一挙に退潮に向ったということを背景として、なによりも、帝国主義が打倒されなければ、植民地・被抑圧民族は解放されないとするドグマを粉砕したところの第三革命論がある。そして、時を同じくして、こうした第三世界の革命理論に呼応するがごとく、帝国主義国におけるエコロジカルな運動は、生産・消費協同組合運動、あるいは、「緑の党」などとして高揚したのである。これへの一知半解な迎合こそが、新左翼を自称する第三世界革命論である。

第二に、農業・農民問題を論じることは、「百姓のシンパだ」、「今日の自由化は資本主義・市場経済である以上必然で阻止をさけぶのはナンセンスだ」、あるいは「自由化反対は民族主義だ」こう言った議論をする人々が新左翼を自称している。観念的には、第一の人々よりうなずける面がなきにしもあらずである。しかし、実際問題としてはなんらのインパクションをも誰れにも与えない。なんとなれば、自らは一切手をよごそうとしない傍観者にすぎないからである。

わたくしは、苦悩する一人の人間を目の前にして、そのひとの苦悩を代行することはできないにしても共有したいと思う。わかり合いたいと思う。つまり「シンパ」たり得たいと。また、農協と食官制度こそが農業・農民をダメにした、と。そんなことは百姓自身が百も承知なのだ。問題は、その先きを提出しうるか否かなのである。それが「連邦制」で解決しうると思い込むのは勝手だが、それこそ、資本主義的生産様式とこのブルジョワ独裁国家を問わずして不可能であろう。いいかえればこの「連邦制」は、革命だ！と言っている以上のことではない。「生産・蓄積・分配・流通」それ自身を現実的に変革するプロセスを考慮せず、アプリオリに革命を主張したところで、ノミの一飛びの意味をももたない。

戦後日本資本主義の再建とはほかでもなく、二次にわたる農地解放と食管制度にあったことはまぎれもない事実であった。そして、独占資本主義として一人歩きするや一九六一年の農業基本法によって小規模経営農業の切りすてをすすめはじめたのである。

ここに一冊の立派なパンフレットがある。

川島豪、渡辺正則共著で『マルクス主義経済学と農業農民問題――ブント系諸君の誤りを半面教師として――』と題された。解放の旗編集局発行のものである。

このパンフレットを読了するには、超大なエネルギーと忍耐が必要だ。なぜかと言うと、日本における農業農民の現状を念願において論をすすめると言うよりは、レーニンの「農業問題についてのテーゼ原案」をテキストとし、このテキストをいかように解釈しうるのか、その限りで、塩見孝也著『論叢』や『共産主義』一六号の資本主義批判から農業・農民なる語句の部分を非マルクス・レーニン主義であると批難している。そもそも、私は、塩見氏やブントが七三年・七四年段階で日本農業について深刻に考えていたなどと思っていない。そもそも、農民と何らかの交渉をもとうなどと思いもよらなかったと。たかだか、プロレタリア独裁を形成するうえで敵にはしない。という程度のもの、川島氏と渡辺氏にあっても「労農同盟」は可能だ、

その基礎として資本主義批判からストレートに方針を導びいているにすぎず、誰れがどのようにしてどこから実行するのか、については触れようともしないのである。もちろん、私は「労農同盟」などにこだわっていない。

さて、私は、単純な素朴実践主義者であったことに誇りすらおぼえており、徹底的に「百姓のシンパ」になりきろうと考えている。

戦後日本の農業政策の一例のみを示しておく。

食管制度は、敗戦後の食糧危機に際して、とくに、都市労働者の食糧危機に際して資本家と労働者が一体となって農民から食糧を強奪するための法であった。生産管理・食糧増産運動を見よ。高度経済成長期、すなわち一九五〇年代中端からこの関係は逆転し、今やこの食管制度は、労働者といわゆる市民の批難の的になっている。

「百姓を喰わしているのは都市労働者だ！」というのが、この二〇年来の主張である。また、農民が自由民主党の最大の票田であったことから、百姓憎しは、革新を名乗るすべての人々の心に巣をつくっている本音でもある。そして、相いも変らぬ、小作だとか、封建制だとか、超観念論をもてあそんでいる。自由民主党も今や百姓は金を喰いすぎると言うので最終的に切りすてようとしている、これが、選挙区制度の改悪の本質である。米の自由化が百姓の息の音を止めるのではなく、その政治的利害代表の位置から自民党がおりるということが二千万農家人口の危機を示している。

地球上で最大の人工的造形物は何か、万里の長城などでないことは言をまたない。いわずとしれた水田を置いて他にない。

ところでこの三〇年間、日本農業・漁業・林業のことごとくは、たちゆかなくなってきている。工業の生産力の発展には及びもつかないが、しかし、世界では最も進んだ生産力上昇をつづけてきた。にもかかわらずたちゆかなくなった。それは、貿易摩擦の犠牲となったばかりではない。ネコの眼農政にあるばかりでもない。勿論、貿易問題、農業政策のデタラメなど数上げれば幾らでもその原因はある。しかし、根本的には農民の自律の問題として把えなければならない。

もはや、農協や県経済連や政府自民党からの自立こそが農民をして人間の生存に関わる生産者としての自覚を促す唯一の方法である。百姓が補助金なる借金地獄から抜けだすには、政府自民党と手を切る以外にない。政府自民党とつき合ってどんな良い眼にあってきたと言うのか、これからも、ゴルフ場で働け、リゾートマンションで働け、原発で働け、飛行場で働け、レジャーランドで働け、これが地方・農民に対する政府の方針である。

つまり、生産者としての喜びよりも現金になる苦役を選択せよ！というのが政府自民党の方針なのである。そして、都市工業労働者市民は、ますます、顔のないトマトやキュウリ、米を食べることを強制される。北アメリカ帝国主義は、一九三〇年代に国家の一大プロジクト、一大保護政策として農業・農民政策を展開してきている。EC・欧州共同体もまた、食糧の獲保のみならず輸出産業と把え実行してきており、その成功の典型にスペインがなっている。

われわれは、第一から第三までの人々の意見にも十分耳を傾けつつ、都市生活者としての自己のありようを農民との関係で改ためて構築してゆきたいと考えている。その場合、われわれは、きわめて実践的に関係してゆきたいと考えている。帝国主義が打倒されなければ、農民の自立はない、などと言う思い上りを廃して日常の問題としてあることを突き出してゆきたい。

誤解のないようにしておきたいが、この「日常」と言う時、樋口篤三氏のように生産者組合と消費者組合運動が革命の戦略だとか、あるいは、生協運動を共産主義運動の綱領だなどと主張するものではない。労働組合運動について述べたごとく、先ずは、全国で自律した多くの農民が現実に運動を展開している。こうした農民・漁民自身が全国的な展望をもつべきではないだろうか。と言うことである。特にエコロジカルな運動は、市民と言わず農民も多く参加しており、そうしたなかですでに日常的な連帯共同の作業が開始されている。われわれの目にそれら実践的な連帯・共同行動が見えてこないだけの話しである。目に見える形にしたいものだと思っているにすぎない。

三市民運動について

――統一地方選をたたかおう――

一九八三年段階で六五一市、市議約二万、女性議員約五百といわれた昨夏参議院選挙では「ちきゅうクラブ」「原発いらない人々」ほか、環境・人権などをスローガンとする支持票は約六〇万票であった。

わたくしは、来春の統一地方選挙に、我々の仲間を地方議会に是非おくりこみたいと思っている。「論より証拠」「百聞は一見にしかず」といわれるように、ハンディキャップをもつ人々がどんなに陳情や請願を繰りかえしても実現不可能であったものが一人の議員の誕生によって環境がザ〆リと変るということがある。八代英太氏の参議院議員としての誕生は参議院議事堂を変えたし、掘利和氏の誕生は参議院員議事堂をさらに変えた。

権力・行政が差別をつくり増長しているとは古くから言われており、現在も言われつづけている。国際化が主張される裏側では、より深刻な差別、被差別が進行している。高齢化社会の到来や福祉がさけばれる一方でその隔離や排除の方向が福祉の名で横行しているのも事実である。地域住民と自治体があまりにも遠く感じられている。これらは、行政と自治体のみにその責任があるばかりでなく、その主体であるべき住民・市民に行政と自治体を奪い返すたたかいの不十分性にあることはいうまでもない。それ故、我々は、既成政党・自民党や社会党・共産党に一切の幻想をもたない草の根運動を基礎とし各地方・各自治体にあったたたかいを組織してゆかなければならない。

わたくしの大先輩は、三多摩地区で社会党から市議となり市議一期を総括して、能力があり、実行力に富んだ人間を社会党と言えども排除することを身をもって体験したと、そこでは、保守も野党も既存の権益の防衛と保身となれ合い政治が横行していると。同時に地域住民・市民に支持されるかされないかは、その地域における課題を発見することだと。わたくしは、この先輩の「課題の発見」という言葉に強い衝撃を受けた。彼は六〇年安保をたたかい六〇年代に一世を風靡した大先輩なのだが、地域にベターと張りついて、なんのてらいもなく障碍者と生き、老人や婦人そして、子供たちと共に生きている。わたくしは、彼が社会党から市議に立候補すると聞いて、カーと頭に血がのぼり、わたしの先輩に対する幻想は一ぺんにさめてしまった。それでも、私は、彼が当選できるために誠心誠意努力した。そして、彼が七〇年安保後、一人の生活者として地域にしっかりと根をはり、地域で女性や老人から強い支持をうけていることを目のあたりにして、それはそれで彼の精神の葛藤と、失なわれていない情熱を理解したのである。そこには、帝国主義論をふりかざしての号令主義を見ることはできなかった一沫のさびしさはあったとしも、志を失なわぬかつての活動家の生き生きとした顔があった。

さて、ブントは、これまで反議会主義の立場をとってきたわけではない。しかし、正面から選挙闘争を議論したこともなければ態度を明らかにしたことも少なかった。とくに、私は、あの戸村選挙に際してさえ反対の立場を貫いたのであった。このことを私は誤っていたなどとは考えていない。そこには当然ひとつの時代的背景があるのであり、階級闘争それ自身に対する能動的関わりがある。ともあれ、我々は議会を活用することに不なれである。とりわけ、第二インターナショナルの歴史をひもとくとき、活用ではなく、埋没させられるということは明らかであり、身近には日本共産党のセクト主義・議会主義を見るにつけ、議会に距離をおいてきた。とりわけ、その実体・力量もなく国政選挙への関りには抵抗してきた。新左翼の一方の潮流である革共同は、その当初より、国政選挙に関ってきた、黒田寛一をはじめ浜野哲男と相い次いで擁立し、今日の彼らの人民主義的立場・街頭闘争における市民運動と実力闘争という二本柱の路線は、革共同成立当初よりの大衆闘争路線だと言ってよい。ブントは、こうした革共同に対して一貫して大衆的実力闘争を対置し労働者の武装・武装ソビエト、階級的労働運動論と武装闘争を主張しつづけてきたのである。　しかし、実際には、この三〇年間、地域での共同講入や生活消費者組合運動・障碍者解放運動、反戦反核反基地のたたかい、さらに環境破壊に抵抗する運動や近代農法を問う農民運動など、それぞれが独自に地域に根ざした運動を個別にたたかわれてきている。ブントの分裂の歴史は、統一・連合の歴史であったのであり、そこでは、全国津々浦々でブントは「諸課題の発見」とともに人権擁護、脱原発のたたかいを荷っている。そして、六〇年安保・七〇年安保と異なる政治状況をつくり出しているのだ。であればこそ、予言的に九〇年代とか二一世紀とか言うならば、ブントの時代たらしめる条件は十分あるということである。

六〇年安保・七〇年安保闘争と根本的に異なっているのは、それぞれがたたかいの現場を自らつくり出しているということ。そこでは「総括・情勢・方針」といったような「一点突破」的な帝国主義論では不十分であるだけではなく、あの「本格的な党建設」の時代を終ることによってもすでに時代は変ったというべきである。

将来的には、三割自治を問うことが国家のあり様を問うことになるであろうが、しかし今問われているのは、そこに住んでいる人々、たとえば車イスの人が街に出て買い物ができるような環境である。農村でいうなら過疎化をふせぐために土木工事を推進することのみでは、その後一層の過疎化をもたらす。また一般的に有機農業を主張するのみでも不十分である。これまでの地方政治は、工場誘地が主張され、その工業立地に合わない地域はリゾートがさけば

れている。こうして土地をひっくり返すことが地域の活性化につながるという土建屋的発想とイデオロギーが支配的であった。こうした、他力本願の政治・イデオロギーと袂別すること。

したがって、地域・自治体闘争とは、そこにおける具体的で日常的な人々の生活それ自身の創造的なたたかい抜きにはあり得ないのである。それ故、議員をつくる運動ではなく、議員をも必要とする実践のひろがりである。これを草の根民主主義と言っても良いであろう。

そのためにも、来春の統一地方選には、その典型を断固としてつくり出してゆかねばならない。そして、社・共と一線を画したところの議員連合を展望しなければならない。

いうまでもなく、地域・自治体闘争を地域権力だとか、二重権力だと概念規定をする心算は毛頭ない。なんとなれば、「地域共同体」、地方権力などと位置づけることによって、中央に対抗しようするのであろうが、地方ごとに国家をつくり、連邦制を今日のブルジョワ民主主義のうちに実現しようなど夢をみるのはあまりにも国民経済としてブルジョワ国家「民族国家」を甘くみているとしか言えない。もしそのような権力が実現しうるなら、それは、全人民の一定の武装、それこそ人民一人一人の自律が、自治が、いいかえれば、ソビエトが実現されなければならない。そこでは、単に、市民として権利を行使するのみならず、工場労働者としての組織化など生産と管理についても自治が徹底されなければならないのであって、そこまで、求めているわけではない。この統一地方選にそこまで壮大な展望をいだいているわけではない。

四 三里塚闘争について

三里塚闘争は、我々にとって特別の意味をもっている。

三里塚闘争に一切手をそめず、あまつさえ大衆的実力闘争・街頭闘争について話題の一つも出し得ずに「吾こそは新左翼だ」などと大声張り上げて平気な時代になっている。実に平和な時代というべきか。

我々は、こうした「平和主義」、「新左翼」と無縁な地平で三里塚闘争をたたかってきた。だが、しかし、三里塚闘争は大きな転機にさしかかっていることは自他ともに認めないわけにはゆかない。この三里塚闘争の危機にさいしてどのようにその危機を突破し新たな展望を切り開いてゆくのか。この二〇数年間三里塚闘争に心を寄せてきたすべての勢力に等しく問われている。そこでは、自らよごれをかって出る勇気が問われている。

そこでは、三里塚芝山連合空港反対同盟とともに、たたかいの共同主体を新ためて構築してゆく先進性である。そのこと抜きに従来の主張に固執するのみでは何ものをも変革する主体となり得ないであろう。

三里塚闘争について、これまでの主張を変えるものではない。とは言え主客の条件が現に異なっているということ、そのことを踏えなければならないということ。このことをまずは確認しなければならない。

九・一三闘争から九・三〇現地闘争へと連続決起しようではないか。

C あらたな出会いを求めて

わたくしの場合自らの実践や顔の見える関係としてあらゆる運動を考えてきた。国際主義と言う場合も先ずもって自国帝国主義を倒すこと。そのように考えてきた。差別・被差別を考えるうえでも、先ず、それぞれの被差別者の痛みを分ち合いたいと。そのことを通じて自らは何をなすべきかと。

第二に、だから、帝国主義・民族・植民地問題を考える際に、帝国主義が打倒されないかぎり民族解放はあり得ないとか、あるいは、そのような考え方や闘争は民族共産主義で、否定の対象でもあるかのごと主張することは、それこそ、帝国主義国労働者と「共産主義者」の思い上りだ。帝国主義の侵略と帝国主義的民族による抑圧に現に呻吟している人々、被抑圧民族にとって、即時の解放が問題なのである。ちょうど三〇年前、キューバが解放されたように、北アメリカ帝国主義を打倒するのは北アメリカ帝国主義下の労働者自身である。このように考えるとき、我々にとってのたたかいや連帯のあり方、また党派闘争もきわめて実践的でなければならない。

レーニンは、民族問題を抽象的に論じたことは一度もないのである。つねに、さしせまった実践上の課題としてあった。それほどまでにロシアは多数民族国家であったばかりではなく、ロシア帝国主義と植民地・民族問題に深く関っていたということである。文学的に表現するなら、レーニンは、日常的に諸民族と出会っていたのである。もちろん、我々は、レーニンの出会いと理論を歴史上総括する位置にある。とは言え、それとて、日本階級闘争における国際主義とは何かということにほかならないであろう。

以上三点を踏えて、日本帝国主義と植民地・民族問題について考える。

わたくしのアルバイト先きの同僚、フリーアルバイター君が「金をためて日本人のいない国に旅行したい」と。それを聞いたわが社の専務氏「日本の企業が進出していない国はない。だから日本人のいない国はない」と。実に言いえて妙である。ことほどさように日本の円と商品はすでに世界のすみずみまで侵略している。したがって、そこでは、日本の労働者は、その先兵となって全世界に侵略者としてふるまっていることになる。そして、鉱物・石炭・木材・魚・水・石油・食糧、あらゆる資源を略奪しているのが、わが帝国主義である。

日本帝国主義は、イラクによるクウェート侵略に対して自衛隊の派兵を声高に主張しだした。評論家の中には、日本国憲法よりも国連憲章を優先させるのが国際化時代にふさわしいと、こうした主張の根拠には、いわゆる第三世界の日本帝国主義からの解放に対する自衛隊による弾圧を念頭においていることは明らかある。フィリッピンではすでに数回の誘拐・人質事件があり、日本の侵略企業はますます人民の憎悪の的になってきている。我々は、いかなる立場をとるのか。誰れと連帯するのか。反革命を許すのか許さないのか。

日本帝国主義は、反革命独裁政府を手助けする最大の援助国となった。民族解放戦争や独裁政府打倒闘争をたたかっている人々は、日本の労働者や良心的市民に対して、「どんな援助よりも、どんな連帯のあいさつよりも」ＯＤＡをやめさせてくれ！と。「皆さんの税金が我々を苦しめている」と。

また、日本は、単一民族だなどとふざけたことを言っている人々がいる。日本政府は、近年ようやく複数民族の存在を認めはしたが、単一民族国家論をとりさげたわけではない。日本政府は、国民として平等である。そのことは憲法で保障しているというそぶいているのだ。アイヌ民族をはじめ、ウイルタ、沖縄など諸民族をもってこの列島は構成されているのである。それ故、彼らの主張するところのあらゆる権利を認めなければならない。とりわけ、アイヌ民族においては、「アイヌ新法」をこぞって要求しているのであって即刻日本政府は認めなければならない。

なによりも、第二次帝国主義戦争によって、その国土と文化を奪われ、なおかつ強制連行を含めこの列島に住み生きなければならなかった在日朝鮮韓国の人々の民族的権利はもとより市民権をも認めなければならない。

日本帝国主義が侵略の先きざきで、蛮行を重ね、軍用に徴用した多く人々に対して、一人一人に賠償する責任を有している。

われわれは、こうした人々とお互いに顔の見える関係をつくり出してゆかなければならない。その基本姿勢は、等身大の関係でなければならないと考えている。

われわれブントの歴史において、日本帝国主義打倒がこの三〇年間のメーンスローガンであった。三里塚闘争においてさえ「侵略反革命軍事空港粉砕」が一貫してスローガンとなってきたのである。すでに、本論文のＢ章で示した幾つかの戦線においても「あらたな出会い」を求めてたたかわれることはいうまでもない。とくに、来日出稼ぎ労働者問題は、労働現場で、各自治体で日常的に問われている。

三里塚・大嘗祭闘争に決起せよ！

三里塚闘争はいよいよもって決戦の秋をむかえている。

三里塚闘争二四年、一期用地内農民は小川源さんをはじめ意気軒昂「話し合い拒否・文答無用・農地死守」を旗織としていささかの動揺もなくたたかってきた。

政府・公団は、こうした用地内農民と支援の不逮転の決意と連帯をクジクためにさまざまな攻撃をしかけてきた。それが、特別立法である「成田治安法」のあいつぐ適用である。反対同盟と支援の分断を画策している。また、昨年来の事業認定と土地収用法に関する公開の法律論争に正面から一切答えきることなしに、収用法適用の恫喝をしてきている。

ここに、反対同盟の「三里塚に民主主義はあるのか」とする文字通りの血のさけびがあるのだ！

われわれは、この三里塚芝山農民の血のにじむ必死のさけびにこたえなければならない。今、三里塚闘争をたたかわずば一生悔を残すことになる。一人一人心して三里塚現地闘争に決起しようではないか。

一方、三里塚闘争二四年、今ほどその危機をさけばれている時はない。その危機とは他でもなく反対同盟と支援相方にあることは言うまでもない。第一に、反対同盟と支援はこの二四年間政府・公団による機動隊政治・暴力を正面にすえた空港建設に対して身体を張って実力抵抗闘争をたたかいとってきた。しかし、八三年三・八分裂は、こうした同盟と支援の関係に大きなミゾをつくった。さらに、いわゆる北原派反対同盟から用地内農民の離脱と第三同盟の形成は、三里塚闘争そのものもってきた全国全人民の抵抗闘争の地位を相対化させてきた。こうした、三里塚芝山連合空港反対同盟の相つぐ分裂は、その支援をも分裂させた。そして、多くの市民、小グループの足を三里塚芝山現地から遠のかせた。

第二に、今日の三里塚闘争の危機とは、ひとり三里塚芝山連合空港反対同盟にあるのではない。いうまでもなく、我こそは前衛なりと自称する我々支援党派にこそ、その責任の大半はある。なんとなれば、この二四年間徹底した路線論議をさけてきたと言うことができる。地域は生きつづけているのである。「農地死守・実力闘争」を合い言葉としてきた我々は、このスローガンそれ自体に疑問の余地をさしはさむものではない。むしろ、この合い言葉こそが農民と支援を結ぶ固い絆となってきたのだ。言うまでもなく、政府・公団の暴力に対して唯一自らの肉体をさらしてたたかってきたのだ。この不退転のたたかいこそが農民と支援の一体感を示してきたのである。だがしかし、われわれが勝利的にすすめてきたこの抵抗闘争は、すでに一世代を超えたのである。すなわち、闘争を経営する・組織の現状維持が課題となっているのみでなく、全国の反基地、開発反対闘争をたたかう農民や地域住民との連帯をつくり出す展望をもたなければならなかったし、三里塚芝山それ自身の地域のあり方や営農方針についても議論してこなければならなかった。そうでないかぎり、たたかいのモデル（典型）となり得ないばかりか、一方的に反対同盟への期待となるであろう。いわば、われわれ党派の主観に合わせた定規でおし計る以外に道はない。

第三に、こうした主体の危機とは、象徴的には用地内農民のうちにあり、また、この用地内農民を囲む反対同盟そのものの内にさえある。われわれは、事実を事実として素直にみすえなければならない。三里塚芝山周辺の地価は、二四年前に比して二〇〇百倍にハネ上った。たとえ農地であろうと例外ではない。

このような状況の変化は、営農精神をクジクに十分である。日本資本主義の現状からみてこの傾向は強められることは疑いないところである。

以上の三里塚闘争を巡る主体の危機に眼をそらし「脱落派・離脱派」、はては「空港との共存・話し合い路線」などと誹謗・中傷するのみでは何ひとつ路線論争の糸口にさえならない。勿論、そうした非前衛的セクト主義者諸君にあっては唯一実力闘争が路線だと思い込んでいる。問題は、今問われている主体の危機とは、ほかでもなく実力闘争の内実、実力闘争をいかに普遍的なものとしてゆくのか、である。

われわれは、日本帝国主義の侵略反革命に反対するその最大の環として三里塚空港阻止闘争をたたかってきた。

われわれは、廃港にするまで三里塚芝山農民とともに弾固としてたたかい抜であろう。

即位の礼・大嘗祭粉砕
闘争をたたかい抜け

即位式を一一・一二、大嘗祭を一一・二一・二三に強行しようとしている。

われわれは、天皇制そのものを断固として廃止されなければならないと考えている。

原則的に天皇制廃止という観点から反天皇制運動を推進してゆくのでなければならない。

われわれは、八七年海邦国体・天皇訪沖阻止をかかげて連続講座を開講しつつ反天皇論の構築とたたかいの陣型を独自に形成してきた。『プロレタリア通信』前号において大葬以降の「日の丸・君が代」に対するたたかいの分析と知念政光論文をもってふたたび今日の反天皇制論と運動に対する一翼を担うべき論陣を開始した。われわれは、九月三里塚現地闘争を皮切りとして一一月天皇・天皇制紛砕闘争の最先頭にたってたたかうであろう。

天皇と天皇制こそは、明治以降、日本の資本家階級、とりわけ金融資本にとって、その精神的支柱となってきた。この百年間国家、暴力の象徴となってきたばかりでなく、侵略反革命の最も中心的イデオロギーをなしてきたのである。かつての「五族共和・八紘一宇」こそは天皇への帰一・同化、さもなくば排外としてあった。このことは「平和憲法」と言われる現在にあっても基本的に変るものではない。とりわけ、文部・法務官僚の頭の構造は、一向に戦前と変らないと言って良い。学校制度こそは、国家経営による一大工場であるが、ここでは秩序ある人間の生産が計画されている。テキストは国家が検閲している。このことを最も単的に示しているのが「国民体育祭」である。その当初、京都からはじめるにあたって、体制の護持。すなわち国体であったこと、ヒロヒトの全国旅行と合せて計画されてきたこととして広く知られている所である。また、法務省は、この列島に特有の戸籍制度をもって、市民一人一人の氏名・名字の根跡を天皇家との結びつきにおいて解釈している。こうした戸籍制度にもとづいて、外登法と入管法を同化さもなくば排外の武器としているのである。

知念政光論文で強調しているように、人々の内心を縛るところの祭祀王への復権を、その国営化を目ろんでいる。このことは、「経済大国日本」・帝国主義的侵略反革命をより大規模に展開せんとする、わが帝国主義者どもの念願である。

先ごろ、オイスカなる帝国主義の手先きがフィリッピン人民解放軍に拉致された。オイスカは、フィリッピンのみならずアジア諸国へ反革命介入してきた。その地域の風土（水土）にあった生活、従来の生活を援助するのではなく、反共イデオロギーのもと日本に輸出できる農業生産力を強制しているにすぎない。いいかえれば、そこの地域の風土・水土と人々の生活を破壊しているにすぎないのである。これがオイスカの正体なのである。これはほんの一例にすぎない。日本の金融資本と巨大企業は、多国籍企業（新植民地主義）としてこの一〇数年間飛躍的に侵略してきた。戦車以外の物・金・人は、いわゆる第三世界のいたる所に充満している。こうした、第三世界市場の再分割戦は、この列島に住む一億二千万人を抑圧しつづけなければならない。

天皇・天皇制と侵略反革命の犠牲にさらされているのはなんといっても在日朝鮮・韓国の人々であり、沖縄・アイヌの内国植民地化された人々である。そして、第三世界から来日出稼ぎを余儀なくされた労働者たちである。さらに、この一両年中にも実行されるであろう農業・農民の切りすてである。

日本資本主義の帝国主義的発展は、文字通りの爛熟期を示している。ここに、帝国主義的な全社会的再編があり、労働組合運動における連合の結成や国鉄の分割民営化と労働組合潰し、国会における共産党はずしや消費税の導入がある。そして、一昨年のヒロヒトの下血さわぎとXデー・大葬における空前の警備こそ、かっこうの「危機管理」としてあったことを見すえておかなければならない。彼らはいぜんとして暴力に訴える以外になかった、そのことは、彼らの最大の弱点でもある。知念政光論文でふれているごとく「日の丸・君が代」強制に対して全国津々うらうらで楽しい草の根運動が展開されている。被抑圧民族、外国人労働者の「自己解放」にむけた。たたかいに連帯する労働組合運動や市民運動もまた展開され出している。

われわれは、こうした運動に連帯しともにたたかうと同時に一一月アキヒトの即位の礼と大嘗祭粉砕闘争の最先頭でたたかうのでなければならない。三里塚闘争からはじまる激動の三ケ月を弾固として斗いきろうではないか。

天皇制をめぐる理論的問題

天皇制の独自性

七〇年代以降の日本帝国主義の侵略帝国主義としての飛躍にともなって天皇制は再登場し、天皇の死―新天皇にともなう一連の儀式・自粛・自衛隊の登場、日本―アジアの反天皇制闘争の発展、アジアの天皇への復権の画策、今秋大嘗祭等々の攻防関係をとうしつつ新しい形で日本帝国主義とその国家に再定着しようとしている。

そして反革命としての天皇制の独自な役割は、その「超」国家的性格、排外と同化、差別と融和の機能にあるとかんがえられる。

それは近代帝国主義とその国家が搾取、略奪、抑圧、差別してきた階級、民族、階層の現実を前提しつつ帝国主義とその国家権力のもとに、独自に組織しつつ再結合するということを意味している。　その場合、天皇制は天皇制固有の古代来の「専制」を前提しつつ、近代（中央集権的軍事官僚機構～機械制大工業）と前近代の、聖と賤の、工業と農業または自然の、前者の下への統合と融合という形をとりながらの統一という機能をはたしている。

それは現実の民族抑圧、搾取と差別、農民抑圧という具体的資本主義的生産様式ならびにその国家の具体的過程でありながら、しかし現実の個々の国家～生産様式を超える―「超国家性」という形をとる、という点が独自である。

従ってそれは市民主義～家族主義的性格をも持つが、他方既存の国家―その武装力とは独自な非合法な武装力（右翼、やくざ）や自衛隊―軍部と密通するという構造を持たざるをえない。

更にそれは既存国家権力の反動化や社会排外主義労働運動・帝国主義労働運動とも相互連動～相乗化し、侵略、差別と融和、排外と同化を推進してゆく力となる。

とはいえ、それは現実の侵略・搾取～抑圧・差別の過程を社会排外主義労働運動や既存権力とともに推進してゆくという事において独自の役割を果たすということであって、侵略や抑圧や差別の過程はもちろんそのイデオロギーをも作りだすことができるわけではない。

帝国主義権力一般や社会排外主義労働運動がそうであるのと同じように天皇制のイデオロギーも天皇制の具体的諸形態も、帝国主義―金融資本～機械制大工業～中央集権的軍事官僚機構の具体的過程に、その第三世界（工、農、労、支配階級）への、農業―農民への、プロレタリアートへの、被差別階層への、搾取・略奪と排外・同化・融合の中に見いださねばならない。

しかしながら日本の新左翼が、戦前の日共の封建制―絶対主義天皇制論を否定しようとした時に用いられた方法はこのような唯物論的方法だったとは云えない。その典型を菅孝行の「イデオロギー的統合」、中核派等のボナパルチズム論―「プロレタリアートとの均衡」論に見いだすことができる。

「天皇制＝統合」説

たとえば菅孝行が、戦前の旧制度的要素をして単なる遺制としてではなく階級独裁の不可欠な要素としてとらえ、天皇制を「農本主義」や「聖と賤」との関連に見いだそうとしたこと自体は間違ってはいない。（農本主義が、アジア主義―軍閥～植民地支配～アジアの天皇と結びついていることについては後問題とする）

しかしながら、そこでの農業・農民を徹底的に資本主義―工業への農業・農民の従属・没落・農民の分化・寄生地主制ととらえた上で、前資本主義的反ブルジョワ民主主義的地主を中心とする金融資本～帝国主義国家への反革命的再組織における天皇制の果たした役割、としてはとらえていない。

前近代と近代との「均衡」として並列化され、「国民国家の様式―民族性は近代以前に深淵する土地所有の形態に規定される」、あるいは、「民衆の自然回復の要求」等として自立化される。

それ故階級独裁に普遍的価値を付与するアイデンティティの根源として天皇制なり旧制度なりは位置ずけられる。（「天皇制解体の論理」「叢論日本天皇制一」）

勿論天皇制それ自身は「階級独裁」とは別に価値を付与することはできない。

金融資本が行うプロレタリアートの支配、第三世界への支配、農業・農民の従属、差別やそのイデオロギーを前提にしつつその再組織―同化・融和、暴力……において独自の役割をはたすことができるのである（戦前と戦後においてその役割は決定的に異なるのであるが）。

菅氏が「現代の天皇の機能とは統合であり」「天皇の資本主義」とか「この統合によって国家は国家たりうる、つまり幻想の共同体たりうる」「国家価値の源泉は天皇に求める」「精神的支柱は共和制は抽象的国民精神、君主国は天皇の人格……」というように、日本の資本主義・帝国主義の発展・再編から天皇主義を位置ずけるのではなく、無規定的に「普遍的価値の源泉」とするとき、それらは戦前の日共の天皇制論から絶対主義・封建制を取り去り、非合理主義・神秘主義を持ち込むものといわねばならない。

象徴天皇制の役割

すでに述べたごとく象徴天皇制は、帝国主義が略奪する個々の階層を再組織し―排外と同化、差別と融和―し、既存の権力の一機構でありつつもそれとは相対的独自に―超国家性―翻訳しイデオロギー化し、組織し、武装する構造を持っているし、又相互浸透的でもある。

それ故それは帝国主義の社会構造、権力構造のあれかこれかでもなくあらゆる構造とからみあっている。

たとえば日本帝国主義の基本的政治経済構造をなしている資本輸出拡大―新植民地主義、NICS―ASEANの盟主、軍備増強・自衛隊強化・海外派兵―日米軍事同盟、軍事官僚機構―治安・帝国主義的福祉国家―金融資本～多国籍企業～工場制度～相対的過剰人口、差別の再編と労働力再生産過程の差別・統合への利用、工業による農業の従属・駆逐、社会排外主義労働運動の勝利と共産主義運動の登場……等々との関連において天皇制は独自の役割を果たしているし、または果たすであろう。

だからたとえば、差別と融和の構造における天皇制の独自の役割やそれの国際的比較等がより一層今後の反天皇制闘争において重要になるだろうと考えられる。

他方では、帝国主義とそのイデオロギーを独自に投影・翻訳し再編する機構としての象徴天皇制の最大の役割が、世界・アジア人民、日本のプロレタリア・農民・被差別階層人民に対する、帝国主義とその国家の明治資本主義化以降の戦前・戦後を貫く正当性と正統性の自己主張にあることも明瞭なのである。それは個々の時代の具体的資本主義的生産様式、国家機構、政策、階級対立、政府権力の当否を超越した、日本帝国主義とその権力の魂を「天皇」「国体」として実体化させているのである。

（それ故海部は朝鮮植民地支配に対して謝罪のポーズをとることがあっても、日本帝国主義そのものは、天皇は謝罪しない）

超国家性や排外と同化、融和にむけて独自に「翻訳」「投影」「自己主張する」源泉としての象徴天皇制は、国家権力の一支柱でありながら「憲法の国事行為」、「皇居―隔絶した住居」、「国家神道を奉じる一家、皇族、ならびに神社勢力」、「古代奴隷制―（絶対）専制からの位階位制の継承」、「帝国主義近代が支配、略奪、同化してきた古い社会・慣習・あるいは自然や農業の継承」、「天皇制が意味する聖と賤、

血統—身分」、等々を自己の内部に保持することによって継承されている。

これらをとうして国家機構の一部でありながら、現存国家機構（議会—官僚機構）への超越性をも有している。

これらを国費で養い、「国事行為」を委ね、かつ天皇の儀式—権威等の既存国家機構の正統化への利用にもちいる。

帝国主義権力との融合

このような象徴天皇制は共和制的帝国主義国家と異なるように見えながら、むしろそのことによって帝国主義国家の一支柱となり、かつ共通物—補完物化する。

すなわち

a　国家権力の正統性・正当性・無制限専制を象徴する天皇制は（具体的既存国家権力への超越性を媒介しつつ）帝国主義とその権力のプロレタリアートへの専制と相互浸透する。

b　天皇制—その身分、聖と賤は、帝国主義国家下の位階位性～忠誠と連動する（叙勲制度等）

c　天皇が代表する身分・聖と賤と、近代中央集権国家—機械制大工業—労働制度への適合～非適合～被略奪等による旧身分・聖と賤・民族等の近代的差別への再編成との接合性を代表する。同時に、かかる近代的差別を前提した上で、中央集権的国家機構（軍隊・教育）や工業を媒介した融和において「天皇の下での融和」を組織する。

d　天皇は金融資本・工業への農業の従属を代表するが、同時に農業に自己のアイデンティティを持つという意味において（大嘗祭と稲作との関連等）農本主義をも吸収しようとする。但し今日農業破壊は強すぎてその余地は少ない。

e　天皇制が代表する、近代（帝国主義）による旧社会（狩猟・農業・「低い」生産性、封建社会等）の略奪等と血統の結合によって民族抑圧・排外に独自の機能を果たす。とともに同化へ独自の機能を果たし、これにもとずき天皇制は「アジアの天皇」へと転化しようとする。

このようにして、天皇は帝国主義と侵略国家一般の正統性を象徴しつつも、

・差別と融和

・「アジアの天皇」の下での民族抑圧・排外—支配階級相互の融合

・超国家主義—右翼・天皇主義・ヤクザ・自衛隊との結合。……これによる既存国家権力、社会排外主義労働運動との相互関連をつくりあげる。

このようにして諸「天皇制」を規定するものが、帝国主義—金融資本とプロレタリアート、農業・農民、差別階層、第三世界（農・工・支配階級—封建～君主制～開発独裁）、帝国主義間の対立と同盟、であることがわかる。

戦前天皇制

たとえば、戦前天皇制すなわち統帥権・天皇主権・国家神道としての中央集権国家（制限議会制を含んだ）—工業化・金融資本化下の日本国家社会は

a　アジアの、アジア的封建・専制のなかで最も進んだ国家・社会として登場し、且つ先進帝国主義と闘うということをとうし、最も残忍・侵略的でありつつも国内の自由民権・アジア主義等を吸収しつつ排外・同化を担う制度であり

b　天皇主権—統帥権—国家神道は、帝国主義がプロレタリアへの搾取・抑圧を基本としつつ、工業による農業・農民の従属をおしすすめ（または工業化のための農民略奪）、その結果農村の没落・荒廃・分化・寄生地主制の拡大をもたらし、農民が前近代的地主制への隷属を深めた時（封建的ではないが資本主義的ではない。—土地が主要生産手段となっている、全剰余労働の搾取、物納制地代等。それ故地主制の廃止自身はブルジョワ革命を意味する）、この寄生地主制に適合し且つ農村の上層を帝国主義（国家）に「同化」させるのに適合した制度として天皇主権・国家神道・統帥権は存在した。

c　それ故資本はプロレタリアートに対して、原始的蓄積に固有の強搾取・専制に適合した（これは今日第三世界の開発独裁と共通する）天皇制のみならず、初期からアジア排外主義、前資本主義的農村とその停滞的過剰人口を背景にした天皇制の全重量を課すことができた。

d　あるいは急速な資本主義近代化＝工業化と中央集権国家（軍・官僚機構・教育に代表される）化にあって、旧来の最下層身分が差別解消どころか農民的所有からも脱落または最下層化（朝田理論における「主要な生産関係からの除外」）を強いられた時、従って又解放令・教育制度等が差別の再生産・再編成の制度として登場した時、天皇はこの身分・聖と賤の頂点であるとともに解放令・教育制度等中央集権国家の頂点としても登場し、被差別階層への差別と融和の制度としても登場したのである。

天皇制＝ボナパルチズム説

天皇制をこのような資本主義・金融資本が制圧しまたは再編してゆく諸階級・階層との関係においてとらえるのではない新左翼系の考え方のもう一つはボナパルチズム論である。

それは日共の封建制・絶対制論に対する最も安直な否定—すなわち封建制・絶対主義と資本主義・帝国主義一般の間に中間的諸段階を設定することによって解決したと錯覚したものであった。

エンゲルスが「古い絶対君主制の今日における解消形態……」とか「絶対君主制の基本条件である土地貴族とブルジョワジーの均衡とならんで、現代のボナパルチズムの基本条件であるブルジョワジーとプロレタリアートの均衡も見いだされる……エンゲルス（住宅問題）」と云った時、それは実際の一九世紀半ば以降のドイツ資本主義・ブルジョワジー・プロレタリアート・農村の全階級関係の一つの側面—それもブルジョワジーと封建制との関係を中心にした—にすぎないのであって、プロレタリアート・農民を中心にした全体的分析とはいえない。それゆえ「ブルジョワジーとプロレタリアートの均衡」というような未分化な表現がこの段階ではもちいられているわけである。

このようなエンゲルスのドイツ分析の一側面を拡大解釈してボナパルチズム論として類型化し、（日共理論を乗り越えるために。但し最初に持ち込んだのは服部・神山等講座派）、天皇制論に適用しようとしたのが中核派等であった。がこのことによって、プロレタリアート、被差別階層は勿論、寄生地主制を含む農村、植民地支配を資本主義・金融資本の支配として徹底的にとらえ、他方それぞれにおける前資本主義—反ブルジョワ民主主義制度すなわち軍閥・統帥権～天皇主権～国家神道・寄生地主制等をとりあげ、それらを「帝国主義打倒の一環としての天皇制諸制度の解体」として相対的独自に分析する道を閉ざした。

（それの相互関係についてはここではたちいらない）。

たとえばそこでドイツ（カイゼル）、ツァーリ、日本天皇制をボナパルチズムとして類型化したとき（本多）、すでに資本主義と農業問題下における日本の農民—寄生地主制の分析を放棄したことを意味した（封建制的貴族・地主制を継承したツァーリと明治維新で封建的領有制を一旦解体し資本主義の従属にはいった農民とは根本的にことなる）。かれらがとってかわって宇野の段階論＝帝国主義段階—有機的構成高度化蓄積—逆転—労働力吸収度低下—前近代的制度の温存……をあてはめるとき、それは講座派的「封建制による農業・資本主義への規定」でもない、逆に金融資本帝国主義による農民・農業従属→農民の没落分化→寄生地主制でもない。農業—工業を労働力吸収度で関係ずけるという宇野理論の根源的無内容性故に、農民問題や寄生地主制とも無関係な、あらゆる階級関係とも無関係な、「ブルジョワジーとプロレタリアートとの均衡」というあいまい且つ力学的言葉のみが生き残り、「予防反革命」「上からの内乱」等がひとり歩きすることしかできない。

だからたとえば中核派が今日の天皇制について、ボナパルチズム、上からの予防反革命、三〇年代へのラセン的回帰とかたり、天皇元首化を云うとき、有事立法・改憲・教育改革と共に「一、武器国産　二、食糧自給　三、エネルギー自給　四、軍国主義教育と徴兵制復活……とりわけ精神面での帝国主義戦争準備（「天皇制打倒論」）」を強調している。ここでは日帝の八〇年代を規定している資本輸出、多国籍企業、外国人労働者、NICS—ASEAN支配階級との結合、日帝の侵略準備と日米共同侵略反革命、等が一切眼中に入らない、真空のなかで「アウタルキー経済」と「侵略」「天皇」が想定されていることがわかる。

戦前—一九三〇年代の（日帝侵略下）天皇制の性格は天皇の統帥権＝軍閥ぬきには考えられず、またアジア諸国＝農業・封建社会・封建君主制、ならびに対英・米帝国主義戦争ぬきに考えることはできない。

他方、天皇の統帥権は資本主義～金融資本の農村従属化—再結合としての寄生地主制ぬきに考えることはできない。

即ち天皇主権・統帥権・国家神道と明治維新で政権をにぎった下級武士団独裁との継承関係は、明治以降の資本主義化下でのプロレタリアート、農民、被差別階層、アジア諸国、他帝国主義国との関係ぬきにはかんがえられない。

金融資本によるプロレタリアート支配への天皇制の利用

第一に、絶対主義的専制または維新下級武士団独裁から引き継だ面をも持つ統帥権・天皇主権・国家神道に代表される天皇制の国家専制としての側面は、いわゆる「開発独裁」とも共通するプロレタリアへの原蓄～搾取への利用、弾圧への利用、プロレタリアートへの統制の武器として勃興しつつあるブルジョワジーによって徹底的に利用された。それは治安警察法～治安維持法に代表された。第二に天皇制は早期からのアジア侵略―植民地支配によって確立してゆくわけだが、このようなものとしての「アジアの天皇化」は、早期からのプロレタリアートの排外化すなわち分裂支配の武器となった。

プロレタリアートの登場以前の自由民権運動においても、労働運動の登場以降もアジアとりわけ朝鮮観こそは日本の共産主義運動が斗うべき課題として登場していった。

第三に天皇制は、資本主義（化）の農村略奪とこれに対する農民運動の抑圧―地主制確立―明治憲法（明治二〇～三〇年代）によって確立してゆくわけだが、この農村の前資本主義的支配・停滞的過剰人口の重圧はプロレタリアートへの支配の武器となっていった。

他方貧農の小作争議―反地主闘争は、地主制打倒―天皇制打倒とともプロレタリアートとの結合・帝国主義打倒の意識性を有していたし、プロレタリアートの解放・運動の発展も農民運動の発展ぬきにはありえなくなっていた。

第四に、天皇制は旧最下層の、近代帝国主義国家―機械制大工業下被差別階層・聖と賤の再編成によって確立してゆくわけだが、この労働者と被差別階層の分裂支配はプロレタリアートの階級的自覚を妨げたし、他方水平社等被差別階層の運動はプロレタリアートの運動にたいして独自の先駆的意義をもちはじめた。

プロレタリアートの運動に対する天皇制の持つ反革命的役割はこれら多岐にわたるわけである。

これに対し金融資本が自己に固有な労働者階級への支配機構―独占、重工業、成年男子労働力の比重の相対的大化（家計補助型といわれた女子労働力にたいする）、労働過程における生産手段への労働者の従属と階層分化、労働力再生産と相対的過剰人口の機構等は一九二〇～一九三〇年代以降のことであった。

従って天皇主義的専制、寄生地主制、軍閥等は金融資本にとって絶対不可欠な機構でなくなっていく面をも持ってくるのであるが、このような工業化自身はとりわけ一九三〇年代、満州事変～ファシズム化下以降急速に進んだのであって、かかる帝国主義戦争―共産主義運動抹殺―ブロック・統制経済の支柱としてむしろ再編強化された。（が第二次大戦后の労働運動発展―労働者支配の基礎となった）。

金融資本の農村支配と地主―天皇制

まず第一に農村は封建制・絶対主義ではないから寄生地主制と天皇制はイコールではない。　他方天皇制は資本主義・金融資本を代表して、寄生地主制のみならず対プロレタリアート、差別、軍閥～植民地全体と関連している。

しかし、プロレタリアートへの反革命一般と区別された天皇制としては、その国内基盤としては地主制に特有な基盤を持った。あるいは確立しつつある地主制の上に軟着陸した。

しかしその場合でも農村の地主制は明治以降の資本主義（化）、工業（化）への農村の従属の諸結果であった。

すなわち明治維新下での封建領有制の解体自体は世界史上類を見ないほど徹底的なものであった。（ただし秩禄公債、高地租が年貢を引き継いだ、豪農～小作関係―全農地の二〇％程度と推定されている―を引き継いだ等単純ではないが）。

寄生地主制は、①明治以降の資本主義・工業化・富国強兵の税負担（国庫収入の八割）にたえられぬ農民の没落・分化のなかで（明治三〇～四〇）確立した。

②それらは日本資本主義―による農民・農業の従属化の始まりであって、工業蓄積の原資（税―地代収入の株投資）、米等植民地農産物の流入、低価格米供出、農村副業・家内工業の駆逐、工業製品市場化、鉱害、低賃金労働力供給地帯化、兵隊供出……へと発展してゆく。

③これらに抵抗する農民一揆・自由民権運動にたいする権力の弾圧、更に経済的には地主制の拡大、政治的には地主層の支配階級への取り込み（明治憲法と大地主層の議員化）―地主を核とする農村の国家への再組織……によって日本資本主義（化）の一大支柱となっていった。（小作地は最盛期全農地の五割を超えた。）

それは労働者・農民への分割支配となり、農民の反資本主義闘争への防波堤となり、或はプロレタリアートに停滞的過剰人口としての貧農を対置することをも結果した。

この寄生地主制は、従って封建制ではないが、資本主義的ではない反ブルジョワ民主主義的前資本主義的土地制度であった。（レーニンのいうように土地の国有化のスローガンもブルジョワ革命であり、寄生地主制の解体自身はブルジョワ革命であった。）。

この農村の「依然土地が主要生産手段である」「全剰余労働の搾取」「物納制」は前資本主義的であり、独特の専制～反ブルジョワ民主主義の基盤であった。

国家神道―天皇主権―統帥権等維新独裁権力を継承あるいは再生産しつつかかる農村を帝国主義権力に再統合するのに重大な役割を果たした。

かくして維新独裁権力は、資本主義化工業化・アジア植民地化・差別とともに農村（寄生地主制）の上にも軟着陸できたわけである。（註）

（講座派の）封建制・これによる工業・資本主義への規定、これによる植民地侵略への衝動＝「日本資本主義の特殊性」……といった逆転した発想はここでは論外とするが、他方宇野理論の取入れによるボナパルチズム論は、資本主義―金融資本と農村支配との分断化・並列化の理論であった。

基本は労農派の「過小農制」論の継承にすぎないのだが、宇野派特有の「金融資本―有機的構成高度化―農村過剰人口の「非」吸収―前近代性の温存論」は

a　「工業・金融資本への農村・農業の従属」という大枠を全体的にとらえることに失敗した。

b　そのため農村のかかえるブルジョワ革命（地主制解体）としての独自の性格を位置ずけられない。c　帝国主義打倒に解消し切れない農村革命～天皇制打倒を、帝国主義打倒の一環としての地主制―天皇制廃止として位置ずけることができない……という結果となった。

ボナパルチズム論は絶対主義と近代的資本主義―帝国主義一般の間に諸々の色合いの経済・社会・国家がありうるということ一般以上のことを云ってはいないわけだが、しかしそのなかでなおかつ階級関係＝資本主義・金融資本～プロレタリアート・農民・被差別階層・植民地……を分析することがマルクス主義のわけだから、単なる社会学にすぎないものであることがわかる。

ロシアのツァーリと天皇制（封建領有制一つとっても全く異なる）をボナパルチズムとしてひっくるめるようなそれ（本多）は死んだ抽象となり、天皇制の「特異性」「専制」「権威主義」「非合理」「反革命」「予防反革命」等の表現が一人歩きせざるを得ないわけである。（註おわり）

統帥権～軍閥支配～植民地～「アジアの天皇」

日清とりわけ日露以降の植民地経営―台湾、朝鮮、満州……は統帥権にもとずく軍閥支配によって資本主義―金融資本の意を体しつつ天皇制により独自の性格を付与された。

とはいえその基礎にあるのは近代―帝国主義による植民地支配、すなわち中央集権的軍事官僚機構―機械制大工業による搾取、抑圧、民族抑圧と同化の機構であることは云うまでもない。

したがってそれはかの二重の帝国主義論＝「封建的帝国主義の侵略性」に由来をもとめたり、封建的農村↓資本主義的市場の挟隘化↓侵略性＝日本資本主義の特殊性に求めたりすることであってはならない。

この侵略性は資本主義そのものの本性にもとずくものであり、また特殊性があるとしても通俗的な「世界的帝国主義段階＝世界市場分割戦の時代の日本資本主義化」一般ということでもない。統帥権―天皇主権―軍閥支配ということならびに、アジアの憲兵としての位置から先進帝国主義（英・米）との対抗関係に到る道の下で、「アジアの解放―アジア主義」の潮流を社会排外主義・農本主義の潮流とともに大量に日帝内にかかえ吸収していったことである。

そこでの天皇制は

a　内閣の統制すら受けない軍部（統帥権）と、植民地経営の軍政（天皇直隷）とが一体化して軍部が独自化し、

あるいは天皇の権威と軍隊内絶対服従が一体化しアジア人民への類を見ない残虐さの機構として存在したこと。

b　軍服を着た貧農を日本的国家主義運動（ファシズム）が吸収するにあたって軍隊―とりわけ関東軍が独自な役割を果たした。

（註　それ故たとえばファシズム＝民間の政治運動、ボナパルチズム＝国家体制、と区別（中核派）することの無意味さも明瞭となる。ボリシェビズムを前提しつつ帝国主義戦争―ブロック・統制経済―共産主義運動はもちろん反政府合法運動（労働組合・議会運動）の抹殺、を意味するファシズムはドイツと異なり日本では広大な植民地支配・軍隊が存在したが故に上から軍部が吸収したのであり、且つ又貧農の比重が大きく農本主義―アジア主義、これらを統合した天皇制のもとに一元化されていったのである。）

c　アジア的封建・農村社会に対する中央集権的国家（立憲議会を一部含む）―機械制大工業としての日帝は天皇制を排外・同化の機構、ならびに立憲帝国主義（英米）にたいするアジア（的農村）の解放へのヒエラルキーの頂点として、即ちアジアの天皇として登場させた。

この場合、同化とは中央集権的国家―機械制大工業の国家・社会による「農村」「封建またはそれ以前」「低い生産性」の社会の征服・併合・搾取・差別と全く同義である。

即ち軍政下での日帝植民地統治＝土地調査～封建制再編～徴税～土地併合、モノカルチュア化と貿易統合、資本輸出～原料略奪～工業化～現地工業破壊、相対的過剰人口化～低賃金労働力利用～強制連行、言語・慣行・氏姓改称の強要、志願兵～徴兵～義務教育の試み、等がそのまま搾取・抑圧制度であり、同時に制度への組み込み・統合・同化である。

即ち統合の強要＝排外であるが、天皇制の下での同化とはそれが自発的たる形をとらせその限りでは「天皇の下での諸民族同一」という形をとらせるのである。（沖縄―併合、朝鮮・台湾―植民地化、中国・満州―侵略・権益等それぞれ全く異なるのだが）。

d　このようなものとしての「八紘一宇」等は抑圧民族の側からの一方的支配・統合・同化の要求のスローガンとして存在したのであり、単なる「非合理主義」「血族共同体」「虚妄」だったわけではなく物質的基盤を有していた。

同時にこの「アジアの天皇化」によって国内的にもアジア主義（自由民権の一部も）等を尖鋭な排外潮流として吸収したのである。

工業化・中央集権化と差別―融和

明治以降、封建社会の階級・身分は、天皇制下富国強兵・工業化への貢献、その専制と秩序への貢献度、天皇への距離＝聖と賤、の下で再編され（華族制度、叙勲制度）たが他方、封建社会来の最下層または資本主義化・工業化への準備におくれた階層も被差別階層として再生産された。

すなわち、・機械制大工業と労働能力の「差別的設定」・中央集権国家―教育と差別の再生産・労働者の分裂支配（朝田理論における「主要な生産関係からの除外」「労働市場の底辺」「分裂支配」）・差別した上での天皇（資本主義―現実的国家機構を超越したものとしての）制中央集権国家への統合または、聖としての天皇の下での同一・融和、として独自な性格を付与した。

全戦線における反天皇・反帝闘争

すでに述べたごとく天皇制はその「超」国家性、排外と同化、差別と融和という形において自己主張する反革命である。

それはそのことによって現実の帝国主義権力、資本主義的生産様式の侵略・抑圧・搾取・差別を権威ずけ正統化すると共に、それとは独自にも組織し、あるいは武装しようとする。

それは自衛隊とも密通し（大喪の礼、高御座輸送）、右翼とも密通し、神社勢力・天皇主義とも密通し、国家機構を権威ずけ（日の丸・君が代・教育等）、社会排外主義労働運動や融和主義と交差してゆく。さらにアジアNICS・ASEAN支配階級にたいしても権威を要求してゆく（ノ・テウとの会談。これを機に日韓右翼の会合ももたれたといわれる）

この日帝のアジア侵略―NICS・ASEAN統合―アジア人民への反革命、自衛隊増強―海外派兵、プロレタリアートへの支配と社会排外主義労働運動、差別の再編と労働力再生産過程での選別・分断・統合、農業の解体……の中で天皇制は再登場してきているのである。

この再登場―帝国主義権力による利用の意味するところは、天皇制再登場そのものに対する戦闘の必要であるとともに、全戦線での―反戦・反帝・反権力、労働運動、農民運動、反差別、労働力再生産過程、反植民地―でのあらゆる形態での反革命（国家、社会排外主義、融和主義、天皇主義……）との戦闘での重大課題とするということでもあるだろう。

各戦線における天皇制の再登場のあらわれは必ずしも均一ではないが、支配権力の侵略、反革命、同化・融和、の動きあるところに必ず天皇あり、（ただしこの具体的・個別的分析は具体的になされてゆかねばならない）、このことを日本革命運動は見過ごすことはできない。

（一本道）

自衛隊の海外派遣を断固阻止せよ！

―多国籍軍・軍事援助・参戦化を粉砕せよ―

イラクは、八月二日午前二時、戦車三五〇両をを伴い、六万の大部隊をもってクウェートに侵攻し、午前十一時には完全にクウェートを占領した。

この電撃作戦に恐怖おののいたのは、サウジアラビアをはじめ君主制と王政をとるアラブ親米・英諸国である。

北アメリカ帝国主義はいち早く七日にはサウジアラビア防衛を口実として戦闘機数十機と地上軍を派遣した。北アメリカは最終的には二十五万の兵力を増派するとしており、このイラク封じ込めにはイギリス・フランスを中心に多国籍軍がサウジアラビア、ペルシャ湾に集結している。その消耗費は一日あたり五〇億といわれている。

北アメリカ帝国主義がこれほどまでに中東に介入するのは、イスラエルの防衛と、なによりも汎アラブ主義・反帝国主義としてのアラブの統一を阻止することにある。

そしてそのことが、帝国主義市場としての中東の維持と石油の安定的供給源としての保持にあることはいうまでもない。

多国籍軍といえどもその実体は北アメリカ帝国主義にあり、その指揮も北米帝にある。

我が日本帝国主義は、八月二九日、いわゆる貢献策なるものを決定した。その費用は一五〇〇億円である。

我々の基本的態度は、一切の帝国主義的介入反対、いかなる軍事介入、侵略・抑圧・搾取・差別を権威ずけ正統化すると共に、それとは独自にも組織し、あるいは武装しようとする。

帝国主義は中東から手を引け！

イラン革命は、アメリカ帝国主義支援にも断固として反対するものである。

さらに見逃すことができないのは、日本帝国主義軍隊の派兵が公然と論議され出したことである。我々は日本帝国主義の軍事外交路線を文字どおり国際主義にかけて阻止しぬくのでなければならない。政府・自民党のいうところの国際化時代における貢献策なるものは他でもなく帝国主義的な膨張の軍事的防衛にほかならない。

イラン・ホメイニ師を中心とするパーレビ打倒は、アラブのイスラム世界に一大衝撃を与えた。このイラン革命の波及防止にその正面に立ちはだかったのがイラクであった。帝国主義とその死の商人はここぞとばかりイラクを支援し大量の武器を売り渡したのである。こうしてイラクに八年間におよぶ戦火と、多額の借金を背負わせたのは帝国主義者である。今その武器は汎アラブ主義を掲げるバース党・イラクによって、クウェートへの侵攻を招いたのである。アラブの心は一つとするバース党は、その盟主たらんとしている！汎アラブ主義・アラブ共栄圏構想が一人イラクによってのみ、その武力によってのみ可能だとするのは不見識もはなはだしい。とは言え、オスマン・トルコ帝国以後、イギリス、フランスによる恣意的な線引き・国境によってアラブ世界が引き裂かれたことも事実である。

パレスチナの解放を含め、帝国主義は直ちにアラブ・中近東から手を引け、世界の憲兵アメリカを打倒せよ。

日本帝国主義の参戦断固粉砕！
自衛隊の海外派兵を爆砕せよ！

『プロレタリア通信』編集委員会